

# ひとはく 研究員 だより

両生類は近年、哺乳類、爬虫類などに比べ、特に減少の著しい種が世界的に目立っています。今世紀に入って絶滅した種も少なくありません。日本国内でも約3分の1の種が環境省のレッドリストに絶滅危惧種や準絶滅危惧種として挙げられている状況です。その主な理由の一つとして両生類の生存には、親は陸域、子（オタマジャクシ）は水域という異なる二つの生息環境が、ともに良好な状態にあるのが必須なことが挙げられます。

例えば私の住む伊丹市では、1990年代の末頃までたくさんいたトノサマガエルが、2003年頃を境に全く見られなくなっていました。

## 主任研究員 太田英利さん

### 伊丹市のトノサマガエル

た。トノサマガエルのオスは繁殖期の5、6月になると、日没後には特徴的な声でさかんに鳴くため、いれば見落とされることはありません。以後、繁殖期には毎年、日没後に市内の水田や川沿いをあちこちと回ってみるのですが、トノサマガエルの声を聞くことは一度もありません。



このカエルは今世紀に入って数年間で、伊丹市内から完全に姿を消してしまっただけです。原因としては農業用地、特に水田の減少や、農法の変遷の影響が考えられますが、さらに詳しい検討が必要です。トノサマガエルに限らずわれわれの身の回りでは、ごく当たり前に

たはずの生き物が次々に姿を消してしまいつつあります。私の研究は国内の各地を繰り返し踏査して、専門



1999年頃に伊丹市内で撮影されたトノサマガエル。このカエルは撮影からほどなくして、同市より完全に姿を消してしまっただけ（堺勝重さん撮影／伊丹市提供）

## 2003年ごろを境に姿消す

とする両生類や爬虫類各種の生息状況を観察・記録し、また各種の過去の分布記録に関する文献情報や、博物館などの収蔵標本の採集時期・採集場所の情報とともに検討することで、それぞれの種の長い目で見た増減の傾向やその原因について説明するものです。得られた成果は研究論文として公表する一方で、環境省や兵庫県、沖縄県、鹿児島県などのレッドリスト、レッドデータブックの作成・改訂の際の基盤情報ともなっています。

なお兵庫県のレッドデータブックの主な掲載種については、10月12日より人と自然の博物館で開催される特別展「ひょうごのレッドリスト展」哺乳類・爬虫類・両生類・魚類」で標本が展示されます。伊丹市のトノサマガエルのように、身の回りに普通にいたはずの動物が、実はいま危機的な状況にあることを認識する、契機となるかも知れません。ぜひ一度ご来館ください。